

安中城址の調査 安中城調査報告書

1 安中城の既存研究

○山崎一 明治39年1906年高崎市の生まれ、戦前、満州、ジャワ戦線に参加、陸軍大尉、参謀、戦後、県立高崎女子高等学校職員 昭和 年なくなる。安中城では昭和9年からの調査 群馬県古城塁址図集第1－5集1962年昭和37年 群馬県古城塁址の研究 昭和47年1972年自序の中で城跡が好きだから調べる。群馬県の全城跡を調べる。平成2年1990年1月3日83歳死去。東西650m、巾350m、本丸は太郎兵衛屋敷、東西150m、南北100m、二の丸東西220m、南北180m、西郭東西南北とも200m、三の丸に武家屋敷

○淡路博和 安中城・安中藩・安中城址の覚書、平成元年1989年6月 現存建物・昭和58年現在、茅葺の家11軒、井戸13個、城門3個(大竹の坂本家、下磯部の須藤家、熊野神社)土塀の瓦、下磯部の須藤家、武器蔵、高別当の中島家、東門番所、往時の場所に、家老屋敷の一部、安中教会牧師館、壕跡、安中氏時代の石積みが残る。

○文献からは黒田基樹氏による安中氏の研究、「戦国期安中氏の動向」 2010年学習の森平成22年度企画展講演会、2012年4月29日の安中市教育委員会による「安中氏に関する一考察」がある。。

○安中市教育委員会による発掘調査に基づく考察

1990年西町、谷津遺跡の南西端に西門の一角と思われる石積。1991年池尻遺跡にの発掘により、安中氏以前の堀跡が発見され、窪庭館として、地割から100x100m、または

100x50m の居館を想定されている。2011年安中城Ⅰ文化センター駐車場建設、Ⅱ安中
中小学校増築、Ⅰの1号トレンチからは巾10m、底部7, 5m、深さ4, 5mの中世の堀で西
側から埋められている。2号トレンチからは近世安中城東端の土塁と石積みが検出されて
いる。Ⅱの東端の堀は巾4, 5m、深さ2, 3m。架設トレンチ東端の堀と合わせ、中世の大
規模な南北の堀を想定されている。平成23年2011年8月安中市学習の森夏季企画展
発掘された安中の中世遺跡講演会資料で、安中城と関連遺跡という現状図を発表されて
います。

2 本日の報告

城絵図の収集、分析という史料学、日本城郭史という文献から、さらに、城跡の縄張調査
という軍学者の視点から学際的に事実を明らかにしたいと考えています。安中城は時代を
通じて、碓井川と九十九川を自然の要害とし、北の断崖を背景として、南向きに防衛され、
碓井谷の東西の交通を遮断するために構築されています。

第2部の1 中世安中古城

安中志 築瀬村古城跡 建治元年1275年4月安中家の先祖、二位中納言惟基入城、築
立て、居住、3、4世後、重国康永6年1347年越後に引き移る。松井田板鼻間の東山道
は不明、近世中山道より北。

鎌倉滅亡後、建武新政上野国新田義貞守護兼国司

南北朝の騒乱 室町幕府 上杉憲房上野国守護職 上杉憲顕守護職、暦応元年1338年

足利幕府開設、上杉憲顕暦応3年1340年関東管領 観応の擾乱 尊氏・直義兄弟戦い
駿河薩埵山対陣 観応2年1351年上野国戦争尊氏勝利 上野国守護上杉憲顕失脚。近
世風土記では築瀬城の安中重国が新発田に戻る。

宇都宮氏綱上野国守護職 芳賀禪可守護代板鼻拠点 康安元年1361年関東管領畠山
国清失脚 上杉憲顕関東管領上野国守護職復帰 阻止する禪可を鎌倉公方足利基氏が
追っ払う その後、上野国守護職は上杉氏が世襲

上野国守護職上杉氏は鎌倉公方足利氏を補佐する関東管領を兼務、上野国には守護
代大石氏、長尾氏 長尾氏総社、鎌倉、白井に分かれる

応永23年1416年10月鎌倉公方足利持氏と前関東管領上杉氏憲(禪秀)対立 上杉禪
秀の乱 幕府の介入により持氏勝利 持氏4代将軍義持の猶子

永享元年1429年5月足利・鶏足寺世代血脈、慶秀法印 安中の後閑北野寺吉祥院と号
す、上野州安中三木慶秀律師に付釈論を就学す

3 群馬県重要文化財榛名神社文書

足利持氏書状応永24ー31年ごろ1417年1423年

3月28日鎌倉公方足利持氏 木部弾正左衛門入道道金に、上野国榛名寺別当職と寺領
を安堵する。

富原文庫2月26日木部弾正左衛門道金書状石刷・群馬県文書館蔵榛名町榛名山榛名

神社文書昭和51年6月1日写真・榛名町誌資料編2中世237某入道覚書・榛名神社所蔵

某入道文書は同一であり、作者不明の某入道文書は付箋がはがれる前は木部道金文書

であった。これは木部道金が安中、後閑、小幡の内、望みのところを与えるとの文書であり、

地名としての安中の初見である。年代が記されていないが、足利持氏書状と同時期と考

えると1417年から、持氏の死去する1438年の間に安中は存在していたことに成り、安中

地名の発祥は通説の永禄2年1559年を142年から121年さかのぼることに成る。

幕府と持氏の対立 永享10年1438年 持氏幕府により誅殺

4 戦国時代は上杉武田北條の進出により、在地領主は東奔西走、離合集散を繰り返した。

享徳の乱1455年—82年関東の戦国時代は鎌倉公方後の古河公方と関東管領山内上杉の抗争。

享徳4年1455年5月13日新田荘の岩松持国宛足利成氏書状の野田持忠副状に佐久の大井播磨守が碓氷坂を超えて上野国に進出し安中左衛門之知行分に陣取(安中氏初見資料)足利成氏は関東管領上杉憲忠を誅殺し、足利上杉抗争の中で岩松や大井は足利方、安中氏は上杉氏の被官として存在していた。山内上杉は上野国を本国として、武蔵西部にわたる戦国大名。

長享元年1487年安中出羽守忠親 越後新発田より松井田小屋城に移住 和田記 子安

中伊賀守忠清 孫安中越前守忠政 安中左近次郎忠成 原市榎下城築城

享禄2年1529年8月24日本朝通鑑、上杉憲寛が安中城攻撃、小幡氏が憲寛から離反、

9月12日安中に陣する憲寛を破る。

享禄4年1531年山内上杉の内乱。当主憲寛(古河公方足利高基の子)と上杉竜若丸(前代憲房の実子、のちの憲政)が戦い、竜若丸勝利

天文2年1533年鶴岡八幡宮造営勧進東国武士を記した快元僧都記2月9日条、碓井郡

領主として、安中宮内少輔、鮑間、依田、諏方、このころ、諏訪氏は松井田、安中氏は安中、築瀬、鮑間氏は秋間、依田氏は後閑板鼻を本拠。

黒田基樹氏の研究「安中氏の研究」戦国大名と外様国衆で宮内大輔顯繁 永正4年 — 宮内少輔長繁 天文2年—21年 —越前守重繁 永禄元年—11年 —左近大夫景繁 永禄8年—天正3年 —七郎三郎 —左近大夫 天正7年—17年

天文14年1545年8月関東管領上杉憲政、今川義元同盟、今川武田同盟により実質三国同盟となる 天文14—15年4月上杉憲政川越夜戦、北條氏康方、北條綱成が占拠する川越城包囲、古河公方足利晴氏を味方に大軍で6か月包囲、天文15年1546年4月20日北條氏康打ち破り、武蔵は北條に。

天文15年1546年甲陽軍鑑10月3日碓井峠合戦 関東勢2万5千、武田の板垣と戦う。

合戦後、上杉憲政は上野国平井城へ 天文20年1551年7月20日上州平井の合戦勝利、関八州北條の支配下に

安中氏等利根川西の勢力は上杉憲政の乱行故に北條氏に

天文21年1552年1月10日上杉憲政北條氏の攻撃により平井城を出、上杉氏の上野

支配は崩壊した。北條氏康の支配。

安中氏は被官ではなく、自立した国衆知也、安中領を独自に支配するようになった、(黒

田基樹)北條氏とは自立性を前提に、軍事的政治的統制、従属関係。

天文22年1553年から天文23年にかけて、武田信玄、北條氏康、今川義元三国同盟

天文23年1554年8月2日北條氏が安中源左衛門を江戸市谷八幡の代官職に。

弘治2年1556年11月16日古河公方足利義氏感状写しに上州安中城における合戦に於

いて、森孫八郎の活躍をほめるのが初見である。

弘治3年1557年4月武田信玄三ヶ尻で長野業政と戦う(信玄の西上野進出始め)

永禄元年1558年閏6月18日北條氏康安中越前守重繁に吾妻谷へ出陣命ずる。上杉憲政 越後長尾氏との敵対関係を宿怨を捨て、長尾景虎を頼り越後へ。

永禄2年1559年4月安中記によれば、安中忠政は安中家中で秋間七騎の一人与力12

騎足軽55人知行1100石余の窪庭図書に代替え地2073坪(6840m²)を与え(、安中

志 窪庭観音堂)榎下城から野尻に移り、安中と改めた。安中城の鬼門除けに熊野神社

建立 祈願所真言宗妙光院 安中の地名は安中氏の入部によって生まれた。

安中記は野後改安中城の規模について

東西200間(360m)、南北100間(180m)、1重(単郭64800m²)、櫓2つ、酉(西)、寅

卯(東北)、想門3つ、追手 酉(西)、牛(南)、卯(東)

近世安中城郭内 約725m(650m)x425m(300m) 城内約195mx225m

郭内50935坪168100m² 城内7300坪24000m²

永禄2年1559年4月3日長尾景虎上洛、足利義輝御内書により、関東進出の根拠を得る。

永禄3年1560年5月桶狭間の戦い今川義元敗死、信玄駿河侵攻。駿河侵攻に反対の嫡子義信永禄10年10月自害。

永禄3年1560年8月29日春日山城を出、9月15日上野国に入る。沼田城(北條康元)明間城(秋間齊藤氏)、岩下城(吾妻齊藤氏)、高山城、倉賀野城、小幡城落城、白井、総社、蓑刈(箕輪)惴望の段。安中氏は上杉憲政の退去により、北條方として安中源左衛門射、安中越前守。さらに厩橋、大胡、攻略、横瀬氏を従属させた。安中氏は北條に離反して、上杉景虎に服属。

永禄4年1561年富岡氏、3月小田原城北條氏攻略の参陣、関東幕注文、255名に総社衆安中、足利衆安中将監が含まれる。

長野業政を旗頭とする箕輪衆は19名であり、西上野最大の武士団を結成していた。親類衆10名、在地領主9名、業政は明応8年1499年生まれ、武田信玄の西上野進出が本格的となる、永禄4年1561年6月21日長野業政63歳死去 12人の娘を在地領主に嫁がせた。松枝城主安中越前守忠政、安中城主安中左近大夫忠成には兄長野業氏の娘を嫁がせた。安中氏は総社衆に属しているが、上杉謙信の元、長野氏の箕輪衆と信玄の侵略に対応している。

永禄4年1561年2月2日武田信玄国峰城攻略、9月川中島戦い 11月信玄北條支援(長野業政の死により)のため、上野国出兵、西牧城(甘楽郡)、高田城(妙義町)、諏訪城(松井田)攻略。

永禄5年1562年2月1日長尾景虎小泉城富岡重朝書状に武田信玄が諏訪城(松井田城)に攻め寄せたが、安中氏が打ち破り大勝利と伝えている。松井田は前年諏訪氏が上杉から離反、武田に従い、安中重繁が松井田を攻略して、諏訪氏を没落させ、その所領を併合し、在城したと考えられる。(黒田基樹)

永禄5年1562年2月17日館林城赤井氏後略、長尾景虎上野国平定

永禄5年1562年5月17日武田信玄倉賀野諏訪安中の苗代を薙ぎ払い、旧暦5月17日は麦秋であり、収穫時期。

5月22日上杉輝虎が厩橋城の北条高広の連絡により、対応を沼田城栗林政頼、長尾伊勢守に伝えている。安中は上杉方。

輝虎は10－11月関東出陣、4月越後帰国 4月から10月まで信玄が進出

永禄5年1562年9月15日信玄の侵略により、安中城落城 那須資矩書状 安中の地被

属本意候 安中城武田方に属す(永禄6年1563年5－9月説あり)

甲陽軍鑑は永禄6年2月27日信玄は安中越前守重繁の守る松井田城、嫡子左近大夫

景繁の守安中城を攻め、安中景繁は直ちに降伏したため、本領安堵、重繁は降伏後、城

を没収され、成敗された。安中氏は武田氏に従属する国衆である、先方衆として、存在。

松井田領は武田に没収され、小山田氏が赴任。諏訪、依田氏より得た所領は没収。

西上野武士団勢力図 信玄公御代惣人数 武田家分限帳

国立公文書館所蔵 御一門内藤氏250騎、信州先方真田250騎、和田70騎、西上野先

方小幡500騎、安中150騎、依田80騎、木部、倉賀野、高山、白倉、海土尾、各50騎、

その他6名155騎等

永禄6年1563年2月10日安中越前入道宛信玄書状、信玄より上杉方の進行に備えるよ

う指示、松井田城へ出張することも知らせている。安中丹後守は北條方。6月23日上杉方

に出していた安中越前守息子と総社長尾氏の息女の人質交換。

永禄7年11月8日武田信玄から松井田城小山田昌成に、真田幸隆から安中越前守重繁

が上杉方と通じる密書、安中越前守、嫡子左近大夫景繁に家督を譲り引退。

永禄9年1566年西上野、上杉武田抗争激化。4－11月上杉方城侵略される。閏8月2

7日信玄、安中越前守入道重繁に書状、9月29日箕輪城落城。

永禄10年1567年3月真田幸隆、白井城攻め落とす。4月総社城落城、利根川以西の

西上野は武田領に。

永禄11年武田徳川同盟、大井川境に分割提案、信玄駿河侵攻、

永禄12年1569年今川氏真掛川城で家康に攻められ、和議、遠江家康領に、5月氏真、

北條氏を頼り、氏直を養子として、駿河1国を譲った。その結果駿河で武田北條が対立し、北條は上杉と越相同盟を結んだ。氏政の子氏秀が謙信の養子となり、景虎を名乗り、上野山内上杉の名跡を継ぎ、上野国を上杉領とした。北條は上杉の関東出兵を要請したが、両氏の武田挟撃はなかった。

元龜2年1571年北條氏康57歳死去。氏政、同年武田と不可侵協定、信玄、西上、遠江、三河へ。

元龜4年1573年信玄、信州伊奈郡駒場で53歳死去

天正3年1575年武田勝頼、徳川の高天神城攻め落とす。

3月24日安中左近大夫景繁に諏訪上原への出兵を命じている。4月長篠の攻防開始、5月21日設楽が原で両軍激突。織田徳川3万、武田1万5千。安中左近大夫重繁討死。

上野志では安中城は安中氏滅亡後、「安中亡び落城の跡、安中討死の末葉の士、民となり、武家、百姓の田畑作り場」とある。

天正4年1576年2月25日武田勝頼、松井田城小宮山昌友に命令書 松井田は武田家直接支配

天正6年1578年3月上杉謙信死去、景虎(北條氏康7男)、景勝(謙信の甥)、対立、越後の大乱、御館の乱、6月、景勝と勝頼同盟、東上野勝頼手柄次第、勝頼、東上野へ 厩橋城北条高広武田方に。

天正7年1579年3月24日上杉景虎殺害。上野国は北條氏へ。

天正7年9月17日武田勝頼朱印状 安中七郎三郎

天正10年1582年1月木曾義昌、織田信長に、織田軍岩村から、伊那谷、高遠から諏訪へ、2月17日大島城に立て籠もる武田方の安中七郎三郎らを攻めて落城させる。3月2日

仁科五郎信盛(勝頼弟)籠る高遠城落城。諏訪高島城でも安中七郎三郎が在城していたが退いた。

3月7日織田信房(信長4男織田軍の先陣)上野国に入り、。

天正10年3月11日武田勝頼天目山自害

5 織田信長時代

3月21日織田氏の指揮下の安中城に織田信房在城

武田領甲斐、信濃、西上野は織田信長が接收。

天正10年1582年3月19日上野国、信濃国佐久郡、小県郡は滝川左近将監一益に与えられ、関東管領を命じている。

箕輪城入城、4月中旬厩橋城に移る。滝川儀太夫を沼田城に。

上野国の内藤、小幡、和田、由良、長尾、安中左近(七郎三郎、上田、木部、高山、深谷、成田、倉賀野、信州真田、人質を出す。五月滝川一益 安中町郷に伝馬定書(安中町初見)安中氏の城下町として宿が形成されている。

6北條時代

天正10年1582年6月2日本能寺の変 6月7日厩橋城へ伝えられる。6月18日北條氏直は上州武州の境、金久保(上里町)に進出、滝川一益と対戦。神流川合戦。18日滝川勝利、19日北條勝利、総社箕輪まで攻め込む。上野国武士、滝川方に参戦。6月20日滝川松井田に撤退。2000騎で碓氷峠を超えて、小諸に。26日信濃路を経て、伊勢へ帰国。安中氏、北條氏に従属、鉢形城主北條氏邦の指揮下、他国衆に

北条氏邦箕輪城接收、松井田城に大道寺駿河守政繁を配置、大道寺は小諸城に入城。

北条高広は厩橋城、真田昌幸は沼田城、岩櫃城支配。

天正10年1582年10月徳川家康と北条氏直同盟。甲信は徳川、上野は北條に、大道寺は天正11年春頃、小諸を放棄し、松井田城に。天正11年1583年9月20日前後。厩橋城北条高広降伏。東上野金山、館林も北條に、真田昌幸は徳川方であったが、徳川北條同盟で北毛二郡を北條に渡すという徳川勸告を無視、豊臣、上杉方に。天正13年1585年9月10日沼田、上田の分断のため、北條は大戸城攻め、安中氏は北條方に。

天正15年5月20日ー29日松井田城普請、同時期箕輪城も10日間普請。10月10日安中七郎三郎、松井田に在城。

天正15年1587年12月3日秀吉、関東奥羽両国惣無事令発令。沼田問題で秀吉の裁定。天正17年1589年7月21日利根川以東の沼田領は北條氏に渡された。11月3日真田の名胡桃城を北條が攻略。

天正18年1590年正月5日小田原城攻め、徳川家康東海道、前田利家、上杉景勝、真田昌幸、北陸道を碓氷峠から上野国へ。

北條方上野国防備体制。毛利文書北條家人数覚書 関八州諸城覚書 毛利文書関八州城之覚

北條氏邦、鉢形城、深谷城、前橋城、倉賀野城、箕輪城、沼田城等5000騎 大道寺政繁(川越城主)松井田城1500騎 等総勢17150騎

天正18年3月1日秀吉、32000の軍勢出陣、29日山中城攻略、3月15日松井田で衝突、25000碓氷峠を超える。4月7日秀吉、付城構築を命ずる。14日松井田根小屋焼き払い。19日総攻撃、20日松井田城は開城降伏した。28日までに箕輪城、厩橋城開城、4

月末までに上野国の諸城攻略、6月14日北武蔵の拠点鉢形城開城。

安中城主安中景繁籠城から、小田原城脱走降伏？滅亡？

6月23日北條氏照の八王子城落城、北條氏規も韮山城このころ落城。7月5日小田原城

北條氏直投降。北條氏滅亡。

北條傘下の武将達は所領を失い、町人、農民に、安中氏の一部は真田信繁に士官、大坂夏の陣で参戦している。出羽最上氏、安藤氏、秋元氏、上杉氏、織田信雄、成田氏等に仕えている。又、新しい領主井伊家に仕えたものも多い。

第2部の2 近世安中居館

天正18年1590年7月11日家康関東移封

A)井伊直政 箕輪城12万石所領 慶長3年1598年箕輪から和田二移り、高崎と改名。慶長6年近江佐和山転封 慶長7年3月42歳死去 井伊直勝遺領18万石継 慶長8年1603年徳川幕府成立 慶長19年大坂冬の陣、直勝病、弟直孝参陣 直勝碓氷牧関所警個

B)井伊直勝 元和元年1615年2月安中藩成立3万石

元和元年1615年2月直勝病により、直孝に封地継がせる。元和元年1615年井伊直勝

は上野国3万石を賜い、初代安中藩主となり、安中に住し、碓井牧関所を警護

慶長19年1614年(元和元年1615年の間違い)安中志(文政天保勝明編纂)によれば、

「春、佐和山より引き移り、安中御城地の御普請始まる。安中の上野尻、谷津、下野尻三

か村の石高の内に、御屋形を立て、4月には安中宿や町並の縄張を行った」とある。寛政

重修諸家譜は翌元和元年の安中入りを伝えている。

元和元年1615年5月8日豊臣氏滅亡

元和元年1615年閏6月13日元和一国一城令布達 各領国の居城以外の支城を破壊する。城郭所有数制限

急度申入候、仍、貴殿御分國中居城をハ被殘置、其外之城者、悉可有破却之旨、上意

候 壬6月13日 松平長門守殿 安藤対馬守重信、土井大炊助利勝、酒井雅楽頭忠世

7月7日武家諸法度 新規築城禁止 全修理届出制

井伊家は直勝の子井伊直好(当初直之)が正保2年6月23日三河西尾城を賜り、城主と

なる。後、掛川城で直朝失心、領地没収

文化元年1804年無城主から城主格へ

井伊直好 寛永9年1612年12月15日継ぐ

元和2年1616年4月17日徳川家康75歳死去

元和9年1623年碓井関所開設

寛永12年1635年6月21日3代家光 改正武家諸法度 堀石垣は許可制、作事は原状

復帰届け出不要だが出されている場合が多い。大船建造禁止 3年1回巡検使派遣 無

嗣卒去大名改易 外様大名の転封 国主城主1万石以上

正保城絵図について

寛永21年1644年9月家光、国絵図、城絵図の聴衆を命ずるも、安中は城ではなかった

ため、調査対象ではなかった、国の重要文化財として現存するものは内閣文庫に63城絵

図、元153城以上あったと思われる。

寛永15年1638年島原の乱後規制強化

正保2年1645年6月23日井伊直好3万5千石三河西尾に転封

万治2年1659年遠州掛川に転封

天和3年1683年8月20日5代綱吉武家諸法度まで 作事元通り届出

宝永7年1710年4月15日6代家宣武家諸法度 土木も元通りでなくて可、許可制、作事は制限なし、但し、享保2年1717年3月14日8代吉宗は元に戻す。

宝永2年1705年井伊直朝(とも)精神病

養子直矩(のり)越後与板に減封2万石

井伊家の最終赴任地である新潟県長岡市与板藩に関し、本藩彦根城博物館の井伊家文書、新潟県立文書館の与板関係資料、長岡市史編纂室の与板関係資料に安中城絵図は存在しない。

C)水野元綱 正保2年1646年6月28日三河新城より2万石、碓井関所預けられる

承応4年1655年武鑑 明暦2年1656年武鑑

万治元年1658年武鑑 官位、石高のみ 大名家格制未成立か

寛文3-4年1663-4 年検地安中領内

水野元知 寛文5年1665年10月26日世襲

寛文7年1667年5月23日水野元知発狂 28日領地没収 安中關所

D)堀田正俊 寛文7年1667年6月7日相模より2万石 安中市史に安中の城主となって

着任というのは誤り。

堀田正俊は慶安4年1651年8月14日1万石で大名に列した。文政2年1819年4月18日城主格となる。

天和元年1681年老中

寛文9年1669年武鑑 上州安中とのみ記入 (城主は御居城と記入)このころ大名家格

制確立か

絵図1 安中御座舗図 日産厚生会佐倉厚生園所蔵下総佐倉藩堀田家文書所収 マイクロフィルム下総佐倉藩堀田家文書平成14年8月19日刊リールR-54の72 千葉県文書館及び佐倉市史編纂史料室に安中資料はない。

絵図2 1683年天和3年、前期板倉氏

諸国古城之図上野安中 広島浅野文庫蔵 昭和56年復刻浅野文庫蔵諸国古城之図 安中が当城でなく、古城に収録されている理由について、安中築城は1705年であり、編纂時は居所であり、城は存在しないため、古城であった。

絵図3 日本城郭史資料 上州安中 陸軍参謀本部作成

参謀本部所蔵、全国1400城絵図城塞釈史の写しか

内容は浅野文庫絵図とほぼ同様、手書き鉛筆写

国立国会図書館古典籍室所蔵 本別20-4

城塞釈史は東京偕行社旧蔵織細焼失した幻の城図集、旗野史郎編纂、陸軍本邦築城史編纂委員会中山光久氏の模写図

注1 上州安中 昭和57年3月31日刊行の教材群馬の文化財3近世編に正保2年1645年安中城絵図として、掲載されているが、年代理由及び所蔵場所が記載されていない。おそらく、前年56年刊行の浅野文庫蔵諸国居城之図から掲載し、水野の着任年を推定で記入し、問題意識を抱えることなく、城としたものと思われる。絵図は浅野文庫と同一である。浅野文庫本には年代の記載はない。

絵図4 上州安中居館之図 元禄10年丁丑1697年始冬下旬 金沢市立図書館所蔵 平成4年絵図地図目録1719番請求番号16, 84-180

堀田氏居住延宝(1673年—1680年)以住之図也

95x140cm

本図は前田家尊敬閣文庫安中町、安中2図の原図である。

両図は本図の中心部と全体を2分割したものである。

金沢市立図書館所蔵請求番号16, 84－160

絵図地図目録1719番176頁

絵図5 1697年元禄10年以降、安中町 前期板倉氏

1661年寛文6年—1691年元禄4年調査

諸国居城之図有沢永貞 安中町 前田家尊敬閣文庫蔵

29x40cm 安中市史復刻付図

絵図6 同 個人蔵、安中町 前田家と同一の内容

絵図7 1697年元禄10年以降、上州安中 前期板倉氏

諸国居城之図有沢永貞 安中 前田家尊敬閣文庫蔵

29x40cm 安中市史復刻付図

大名小路が西門に繋がっていない。太鼓櫓がない。櫓台がない。安中市時代の大手、北門がある。

絵図8 同 個人蔵 上州安中 前田家と同一内容

天和元年1681年2月25日下総古河へ9万石転封 大老就任

翌年4万石加増13万石に

貞享元年1684年8月28日正俊刺され死す。正仲10万石、弟正虎2万石。正高1万石
分与 貞享2年1685年正仲出羽山形転封、

貞享3年1686年陸奥福島10万石転封

元禄13年1700年弟正虎出羽山形転封

延享3年1746年堀田正亮(すけ)下総佐倉10万石転封

宝暦10年1760年老中首座1万石加増11万石

正順(なり)京都所司代、正睦(よし)老中首座

最終赴任地は千葉県佐倉

E)板倉重形 天和元年1681年5月21日下総国関宿より1万5千石

板倉重形は寛文元年1661年12月13日1万石で大名に列した。

天和元年1681年武鑑 上州安中

天和3年1683年武鑑 居城 上州安中 (居城と記す始め)この頃板倉氏は城主格の可

能性。安中志も板倉重形も項に安中御城下、後世に伝え数々としている。

貞享2年1685年『御代々留』によると、板倉重形太鼓櫓突き始板倉重同(あつ) 貞享3

年1686年7月26日死去 9月25日封を継ぐ

元禄元年1688年武鑑 居城 上州安中

元禄4年1691年武漢 居城 上州安中

元禄8年1695年武鑑 居城 上州安中

元禄15年1702年7月4日板倉重同陸奥国菊多郡泉へ転封

第2部の3 近世安中城

F)内藤政森元禄14年1701年7月4日奥州泉より2万石

享保2年1717年吉宗武家諸法度 城郭規制元和へ戻る

寛永11年1634年10月28日内藤政晴2万石大名に列せられる。この時点では城を持って
ない。

宝永2年1705年正月5日城主に列し、安中城築城を許可された。安中記は宝永6年170

9年9月4日普請開始と伝える。正徳2年1712年8月15日城地に行く

安中城

表向き御殿 御玄関、御広間、御広間詰所、溜之間、御槍之間、大目付詰所、表御書院、御小屋敷、御二ノ間、御二ノ間脇

奥向き御殿 御居間、御涼所、御放屋敷、御庭、御台筥、御休息、奥之間、御台筥次之間、御居間書院、御居間脇、御舞台、御二之間、御次、御雪隠、御湯殿

役向き御殿 元御用部屋、軍方役所、御勘定所、溜之間、御茶之間、御徒目付詰所、御代官詰所、中番詰所、御台所、かまど、流、小使部屋、御金蔵

城内施設

町口門—広小路—太鼓櫓—大手門—中間—本丸御殿

町口門から西門までの東西道を大名小路 代官町—4人の代官

絵図9未知

宝永2年1705年正月5日の安中築城に際し、幕府に対し、武家諸法度に基ずく**新規築城許可**願いが構造等を明記した絵図によって提出され、老中奉書による許可状が発行されたと思われるが、まだ発見されない。

宝永2年1705年武鑑 居城 上州安中

宝永7年1710年武鑑、正徳3年1713年武鑑

享保3年1713年武鑑 享保17年1732年武鑑

絵図10 **1721年享保6年8月、内藤丹波守 本丸北方土手崩れ修復願 上野国安中城**

修理絵図 本図には享保6年戸田山城守の裏書が見える。戸田山城守忠真は宇都宮城主

主であり、老中として、修築許可をする立場である。

個人蔵 83x59cm 本図は白峰旬氏の城郭修理規定における全国絵図一覧には収録されていない。櫓台といわれるものは描かれていない。

享保18年1733年4月6日病氣藩主辞去内藤政里継ぐ

享保18年1733年安中記によると、内藤政里、御殿に玄関を立て、西門東門を建て替え、

西門の外に土手を築き、町口の塀の屋根を瓦葺とした。

絵図11 1736年享保21年辰年5月改め 内藤氏

上州安中御城内絵図 129x95cm 二の丸分離前。豊田市郷土資料館蔵 稲荷はあるが石段3段。煙硝蔵なし。

袋書に「政里公は仰せを蒙り、森宇左衛門正儀が上州安中御城内の御郭・侍屋敷目で悉く惣坪数の吟味を遂げ、壹枚の大絵図を櫛田友右衛門に認めさせ仕立て置いたもの」
豊田の古絵図に元禄15年ごろと記されたのは誤り。

元文6年1741年武鑑 同

内藤政里 延享3年1746年4月晦日卒34歳

内藤政苗 延享3年1746年6月23日継ぐ

寛延2年1749年2月6日内藤政苗(みつ)三河挙母へ2万石転封

内藤氏は明治まで挙母藩主

内藤氏の研究は転封され、幕末まで所在した挙母藩今の豊田市でよく進んでおり、大正14年には大著七州城沿革小史、で事績を平成8年には豊田の古絵図が刊行され、安中城絵図も検証されている。

絵図12 1733－1749年享保18年一寛延2年 内藤政里回收以降 安中城曲輪図 20
8x111cm

二ノ丸に土塀が構築され通路と蔵屋敷が分離される。

豊田市郷土資料館蔵絵図 稲荷10間四方高さ5尺とされる。煙硝蔵明地。

絵図13 1733年以降で明治大学本以前 安中城図 美濃部家蔵 安中文化会復刻 二の丸分離後。

本丸北部の虎口が変更される前。櫓台という文字、稲荷構築。煙硝蔵あり、

絵図14 享保6年1733年以降 寛延2年1749年まで 本丸北部の虎口変更。稲荷台2段に構築。裏に煙硝蔵あり。

上州安中城絵図 安中市史復刻 明治大学刑事博物館蔵

豎堀を潰し、崖面を石垣にし、がけ下に水場がある。

G)寛延2年1749年2月6日奥州泉から遠州相良に転封の板倉勝清2万石

板倉勝清は寛延元年1748年11月15日城主となり、2年2月6日安中城を賜る。

宝暦12年5月1762年9代家重 無城主大名の居所造営緩和令 修理は届け出不要 新規構築のみ許可

宝暦5年1765年武鑑 居城 安中

明和2年1767年正月老中就任1万石加増3万石に

安永9年1780年まで幕政に関与 6月28日卒

板倉勝暁(とき)安永9年1780年8月14日継ぐ

寛政4年1792年8月12日卒

板倉勝意(おき)寛政4年1792年9月29日継ぐ

以上 寛政重修諸家譜により校正

板倉勝尚

藩校造士館創設

寛政1789年以降海外情勢緊迫化 雄藩の台頭

文化5年1808年3月造士館開設、

板倉勝明(あきら)文政3年1820年12歳就任 名君

天保7年1836年『武家格令式』

安政3年1856年五料村郷学校(桃溪書院)開設

慶応3年1867年10月、国持大名20家、准国持大名3家、城主大名125家、城主格大名19家、無城主大名90家、城主格に昇格すると築城を許可され、居所を城郭と公称することが出来た。無城主大名は陣屋または居所とした。

武鑑では城主格以上の大名が御居城、無城主の大名は在所とされた。

板倉勝殷(まさ)安政4年1857年4月

注1 大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国文学研究資料室(旧文部省史料館)
上野国安中板倉家文書の内、安中藩内図4舗に城絵図があるか確認中である。5月24日。。

絵図15 明治初年 後期板倉氏

群馬県指定重要文化財小野直文書

安中城絵図 安中藩士小野富三郎(直)天保4年1833—1887年嘉永4年御用部屋書役、
作事奉行歴任、明治以降も郡役所書記

安中市史復刻 安中市教育委員会蔵

慶応4年1868年6月17日岩鼻県 安中市域も

明治2年1869年正月太政官布告関所廃止、4月10日東西門、21日堂峰番所が解体さ

れた。247年で姿を消した。明治初め造士館は文学校を分離、演武場となった。

明治2年1869年5月17日五稜郭降伏戊辰戦争終結

明治2年1869年6月17日版籍奉還、274人の藩主を藩知事に、板倉勝殷(かつまさ)は藩知事となる。

明治4年1871年7月14日廃藩置県幕藩体制崩壊 大名総数285家 安中県、群馬県

廃藩後は安中城地を東町、扇町、西町と呼んだ、扇町は安中城の別名扇城から付けられ、本丸御殿が中心であった。大山融斎は五明城といっている。家臣238名、江戸詰め94名、安中在勤が144名、徒士未満を含めて413名、家族含め800名ほどが城内に居住。明治5年(10－11年)に藩士屋敷図提出、138戸分が残る。(安中市誌944p)

砲術は武衛流、文化頃森本亘理、高島流天保末年星野閏四郎、

下曾根金三郎弟子入り、弘化4年1847年安中藩士250名起請文、安中城の稲荷の奥に煙硝蔵。稲荷は煙硝蔵の防壁か。弘化2年1845年高島流の大砲、モルテール、ホイッスル、野戦砲を鑄造、嘉永3年1850年岩井村から中宿村へ大砲試射、慶応4年1868年世直し一揆の際、大砲を放つ。慶応4年1868年3月17日江戸を、江戸詰め藩士、箱崎、関宿、倉賀野 3月29日午後4時安中城に到着。寺社に仮住まい。住居の建設は安中藩谷津村給人畑(安中1丁目)家屋4棟、長屋12棟建設。城内を旧屋敷、こちらを新屋敷と呼んだ。

明治4年1871年7月14日廃藩置県安中藩は安中県に、19日藩庁を県庁に。8月29日安中城御殿から江戸へ256年続いた安中藩も終わりを告げた。

明治4年1871年10月28日旧8県を廃止、群馬県

明治6年6月15日群馬、入間県廃止、熊谷県に

明治9年8月21日熊谷県の武蔵を埼玉県に、栃木の上野国を合併し、群馬県に 14年2月26日県庁を前橋に。

明治5年3月以降安中城取り壊し、造士館、桃溪書院廃校、明治6年競売、明治7年7月入札価格記録。

絵図16 明治初期 城跡絵図

碓井郡安中町安中城図 安中県庁敷地

群馬県文書館行政文書 100x72cm

絵図17 明治4年以降 城跡絵図

元安中県内麓絵図(城郭内) 群馬県文書館行政文書 65x93cm

絵図18未知

明治政府陸軍省築造局が明治5年3月から8月まで全国城郭の存廃調査を行い、2010年フランスで85場28絵図に及ぶが、安中城は含まれていない。明治4年12月の東京鎮台本営管下9か国の調査にも対象とされてない。

もし、これらが調査されたとすれば、作成者はおそらく小野直であろう。

絵図19未知 数年前の某古書店目録に安中城絵図の記載があり、発注するも品切れで、当時目録を破棄、詳細不明。

安中小学校履歴

国指定重要文化財、群馬県行政文書中の碓氷郡書記小野直『安中小学校沿革史』によると明治6年7月1小学校創立、安中学校というとされている。「明治壬申5年区長猪狩懷忠、戸長小野直等、熊谷県庁に請い、旧藩邸内の演武場を以て仮の公社とす。実に明治6年7月7日なり、之を本行創立の起原とす」とある。安中小学校建設による安中城の遺構へ

の影響は明治40年にある。

絵図20 安中城絵図のコピーがあり、上記いずれの絵図の複製でもなく、原本を調査中である。

注2 昭和63年10月の群馬県立文書館企画展上州の城と城下町絵図展の出展された目録No.29年次不祥安中城御殿中絵図190x194cm豊田市立図書館蔵は残されたパネルで調査の結果、挙母城(七洲城)本丸御殿図の間違いである

注3 群馬県立文書館壬申地引絵図には安中城は欠落している。

注4 国立国会図書館日本城郭史資料以外の絵図群、内閣文庫、蓬左文庫、池田文庫、宮城県図書館、国文学研究資料館、富山県立図書館では安中城関連絵図は無であること調査済。

注5 明治5年3月から8月陸軍省築造局が全国の城郭存廃調査された絵図に関東はもれているが、前年12月東京鎮台管下の24城城郭調査に於いても、報告されていない。

安中城跡関係資料

地図1 明治前半地籍図 前橋法務局高崎分室所蔵

不動産登記法作成までの公図 年記なし

地図2 明治31年2万分一地形図

安中附近迅速測図 第一師団司令部

しろはく 古地図と城の博物館 富原文庫蔵

地図3 明治40年測図正式2万分一地形図

地図4 昭和9年 安中城縄張復元図 山崎一

注5 陸軍参謀本部日本城郭資料に安中城調査図はなく、絵図の写しのみ

地図5 昭和21年1946年米軍撮影航空写真 4月14日 13750分一

地図6 新安中町全図 戦後

地図7 昭和24年2月25日碓井郡全図安中町略図

地図8 昭和42年3月安中市地籍図 安中市学習の森蔵

地図9 昭和63年安中城略測図 群馬県の中世城郭跡 山崎一委員

地図10 平成6年5万分一地形図 富岡町

地図11 平成10年ごろ2万5千分一地形図

地図12 平成13年ゼンリン住宅地図

地図13 平成18年9月2日国土地理院航空写真 30000分一

地図14 平成19年安中市都市計画図 2500分一

地図15 平成21年3月1日図解山城探訪 宮坂武男

平成20年7月19日調査42安中城

地図16 平成25年4月5日・11日

安中城跡現地調査 富原文庫 富原道晴

安中城跡の地形

本丸167m、二の丸166m、大名小路164m、中仙道155m、九十九川143m、碓井川138m、太郎兵衛郭163m、東口158m、出口・城下148m、町口162m、出口155m、西口167m、出口169m、袋町、妙光院168m、窪庭館169m高い、7200m²、展望が聞かない。

安中の地誌

安中志 板倉勝明の編纂 文政天保頃

安中記 安中志のダイジェスト、嘉永5年頃

安中志略 内田南涯 天保2年

西野私記 関島成章 安中藩祐筆

資料提供機関・協力者

安中市学習の森、安中市立図書館、豊田市郷土資料館、金沢市立図書館近世資料室、
千葉県文書館、群馬県立文書館、梅村清春、高井勝巳、池田光雄、彦根城博物館、国立
国会図書館古典籍室、新潟県文書館、長岡市史編纂室、国文学研究資料館上野国安中
板倉家文書